

セッション「東京大学『アダム・スミス文庫』の新カタログ作成 ーデジタル資源を活用しつつー」

セッション代表者・報告者：野原慎司（東京大学）

報告者：有江大介（横浜国立大学）

報告者：福田名津子（一橋大学附属図書館）

セッション要旨

このセッションは、東京大学『アダム・スミス文庫』の新しいカタログ作成プロジェクトを通じて見えてきたことを調査報告するためのものである。

デジタル化の進展とともに、『アダム・スミス文庫』のカタログを up-to-date なものに再整備する必要も出てきた。そもそも、本文庫は、新渡戸稲造がスミスの蔵書の売り立てられているところを買い求め、東京大学に寄贈したことから(1920年)、その歴史は始まる。全世界にあるスミスの蔵書のうち約1割を所蔵している。戦後間もなく、本蔵書は、矢内原忠雄によってカタログ化された(1951年)。本文庫は、スミス本人による蔵書目録(1781年)を含んでいるが、矢内原カタログはその記載内容を転写している。スミス本人の蔵書目録は、水田洋会員が、ボナー版スミスカタログの不十分な点を補うときに役立ったことであろう。その後、急速なペースで、書籍や書誌情報のデジタル化・オンライン化が進められた。それらの今日のデジタル化された資料や、利用可能となった様々なデータベースや情報ツールを活用しつつ、新しいカタログ作りのプロジェクトが開始された。このプロジェクトは、東京大学『アダム・スミス文庫』のカタログ作りのみを目的としているのではなく、下記の二つのことを目的としている。

第一に、本プロジェクトは、東京大学『アダム・スミス文庫』にこれまで投ぜられた研究を振り返ることで、我が国におけるアダム・スミス研究の経過および成果を記憶・記録し、後世に伝えることにしている。第二に、本プロジェクトは、スミスの蔵書内容から、スミスの新たな一面を掘り起こすことに寄与することをも目的としている。

本セッションの有江大介による第一報告「新渡戸稲造購入・寄贈(1920)の東大『アダム・スミス文庫』とわが国のこれまでのスミス研究・スミス像」は、東大スミス文庫形成の歴史的経緯、あわせてわが国のスミス研究について省察する。福田名津子による第二報告「デジタル・ヒューマニティーズの可能性：研究に開かれた新しい目録」は、デジタル技術を用いた研究およびその『スミス文庫』への応用可能性について報告する。野原慎司による第三報告「『アダム・スミス文庫』の調査から見えてくるスミス像」は、『スミス文庫』の蔵書の概要と、蔵書傾向から見えてくるスミス像について議論する。

「新渡戸稲造購入・寄贈（1920）の東大『アダム・スミス文庫』とわが国のこれまでのスミス研究・スミス像」

有江大介（横浜国立大学 名誉教授）

スミス生前の蔵書の約1割弱ほどである東京大学経済学部資料室所蔵の『アダム・スミス文庫』（300冊余；以下、『スミス文庫』ないし『文庫』と記載）のほぼ全体は、1920年に新渡戸稲造（1862-1933）が前年4月に東京帝国大学法科大学から独立した経済学部を祝賀して、新学部に寄贈したものである。当時、新渡戸は経済学部教授籍（1919-1920）、東京女子大学学長籍（1918-1923）および拓殖大学学監籍（1917-1922）を残したままジュネーヴの国際連盟（1920-1946）事務次長（1920-1926）として滞欧中であつた。1920年5月のパリ滞在の後、8月迄のロンドン滞在中の1920年7月、古書籍商（Dulau & Co.）の目録にスミス旧蔵書の一部が売りに出されているのを偶然眼にした新渡戸は（7月23日付け山崎覚次郎宛私信）、それをグラスゴウ大学他に先んじて購入することに成功し、直ちに木箱6箱の船便にて日本に送り、『文庫』は東大経済学部には10月中旬に無事到着した（山崎「アダム、スミス遺愛の圖書」『経友』2号、1921年2月、1-2頁）。当時の古在由直総長宛ての、同年12月21日付けの山崎が代理人となつた「寄附願」が残っていることをみれば、当該の『文庫』はほぼ間違いなく1920年末までに正式に東大経済学部の所蔵となつたと言えよう。関東大震災（1923）の延焼からかろうじて逃れた後、第二次大戦後に若干の追加購入、補修、合本などを行ったが（312冊145部、『東京大学経済学部五十年史』東京大学出版会、1976年、1029頁；314冊、東京大学経済学部資料室 http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/?page_id=485）、現在の『スミス文庫』のほとんどは「全く新渡戸教授の厚意」（山崎前掲、4頁）の結果である。

本報告は、『文庫』の内容とそれから見えてくるスミス像やデジタル・ヒューマニティーズ時代の新たなカタログとその利用のあり方を扱う他の報告との重複をできるだけ避け、『文庫』に関わる以下の諸側面を紹介・検討したい。

第一に、新渡戸が購入・寄贈した『文庫』を構成する書冊のたどつた経緯と、なぜ新渡戸が「厚意」によってそうしたか、また、それが可能であつたのかを考える。経済学研究者ならスミスに関心があつて当然ということ以上に、研究者としての新渡戸自身の研究対象である植民政策論、台湾植民地等との内的関連があるのか否かについて検討する。

既にかなり詳しく紹介されているように（大河内一男『アダム・スミス文庫』

餘談」、『経友』28号、1939年、24-30頁；原朗「A Catalogue of Books belonging to Adam Smith, Esqr. 1781 刊行にあたって」複製版序文、1995年）、1790年7月のスミス没後、まず、その蔵書は従弟の David Douglas (1769-1819) に遺贈され、彼の没後 (1819) は2人の娘 Mrs Cunningham と Mrs Bannerman とに等分された。バナマン夫人が死去すると (1879)、その蔵書を相続した息子の David Douglas Bannerman は2回に分けて (1884, 1894) エディンバラ大学神学部に寄贈した。一方、カニングム夫人の蔵書は夫の死去 (1889) に際しエディンバラにて売りに出され、その一部がエディンバラ大学初代経済学教授 William Valentine Hodgeson (1815-1880) によって購入され、教授の死後に未亡人がそれをエディンバラ大学図書館に寄贈した。別の一部はホジソンの養子で講座の後継者 Nicholson 教授により買い取られ、スミスの故郷 Kircaldy の博物館に寄付された。その他はカニングム夫人の息子でベルファストのクィーンズ・カレッジの R.O. カニングム自然学教授が相続し、その一部が同カレッジに寄付される一方で、残りが 1918年7月の同教授死後の 1920年に Dulau & Co. から売りに出されたという経過であった。

さて、経済書がほとんど含まれていないこの『スミス文庫』について大河内一男は、日本の学史研究にとっては実用的価値のほとんどない「宝物」ではあるにしても「日本におけるスミス研究が、……、こうした『宝物』の保管と存在で刺激されている」と評している (大河内一男「アダム・スミス巡礼」『欧米旅行記』、1953年、235-236頁；杉原四郎「わが国にある外国人経済学者の文庫」京都大学『経済資料研究』1号、1969年、8頁より再引用)。1930年代の Dulau & Co. のカタログ書誌データ表記は簡便なものであるため、新渡戸は『文庫』300余冊のタイトルや内容を必ずしも精査した上での購入ではなかったと推測しうる。では、なぜ新渡戸は私費で『文庫』を購入したのであろうか。

新渡戸は 1909年に東京帝国大学に植民政策講座が新設されて以来、その担任を国際連盟事務次長に就任にする 1920年まで続けた。矢内原忠雄は 1916-17年度に聴講した新渡戸講義の自らのノートを基盤に、1914-15年度の高木八尺によるノート、1912-13年度の大内兵衛のノートを補充して矢内原忠雄編『新渡戸博士植民政策講義及論文集』(岩波書店、1942年)を刊行した(同書まえがき)。その中で、「第二章 植民の理由・目的・利益」では、本国にとっての「植民地の価値は一時的のものであり、植民地が発達するに従ってその意義を失ふものと見て差し支えない」と述べ、そこで植民地に投下された資本の回転速度が遅く個人商業の短期的利潤 (profit) は上がるが一国の利益 (advantage) にはならないというスミスの議論を援用している (24頁)。また、植民地統治に関して、「スミスは自由主

義の人であって、新開地[アメリカ]の隆盛となった原因を自由に帰した」(101 頁) という点や、東インド会社を念頭に置いての「商人は王としては貧弱である、不適當である、といて大いに特許會社を攻撃した」(107 頁 ; 113 頁、147 頁でも同趣旨の言及) 等のスミスの評価を『国富論』の植民論から採り上げている。

この新渡戸の植民政策講義は、地域はアメリカやアフリカ、東欧から中東まで広範囲にわたり、ヨーロッパ列強の植民化の経緯を踏まえたドイツ、イギリス、フランスなどの諸学者の植民論を網羅し、経済論、人種論、文化論まで幅広い知見が示され、さらに、講義題目から当然とはいえ植民政策論を巨細に検討するなど、あたかも、読み方によっては“植民地獲得・運営マニュアル”とも言える内容となっている。もちろん、こうした内容には日清・日露戦争後の台湾、朝鮮半島の併合に典型的に示される新興帝国主義国としての「大日本帝国」にとっての重要課題が植民政策であった時代状況と雰囲気強く反映している。また、新渡戸自身の 20 代を通じたアメリカのジョンズ・ホプキンス大学 (1884 年～)、1887 年から 91 年にかけてのドイツでのボン大学、ベルリン大学、ハレ大学 (農学博士号取得) の留学は、当時の欧米経済学の概要を幅広く獲得することになり、そこに植民論を通じてのスミスへの関心と一定の共感とが湧くのは自然な事と推察される。新渡戸の演習に参加していた大内兵衛は、「新渡戸先生はこの演習の時に、『君たちは大学にいる間に、一度はアダム・スミスを読まなければいけない』と いった」ことを紹介している (大内『経済学 50 年』上、東京大学出版会、1959 年、22 頁)。矢内原忠雄は植民政策論や『国富論』の他、セリグマン『経済原論』の講義を受けたことを記していることもその当時の事情を覗わせる (矢内原「私の歩んできた道」、『矢内原忠雄全集』26 卷、1964 年、19 頁)。

ここでは、新渡戸や矢内原の植民政策論を論じられないが (両者に共通するキリスト教信仰に基づく “Colonization is the spread of civilization.” など)、新渡戸のスミスへの関心と独立間もない東京帝国大学経済学部から離れていることを勘案すれば、彼によるスミス蔵書の購入の背景理解としては十分ではないだろうか。また、彼は、多くの言語に翻訳されるなどベストセラーとなった 1900 年出版の *Bushido, The Soul of Japan: An Exposition of Japanese Thought* (1900) の印税収入他、国際連盟からの給与など当時の日本の水準で言えば『文庫』を簡単に購入できるほどの相当な高額所得者であった。

ところで、当該の東大『アダム・スミス文庫』については、経済学部創立 30 年記念出版として矢内原の編集によりこの蔵書の英文カタログが出版された (*A full and detailed Catalogue of Books which belonged to Adam Smith, Now in the possession of the faculty of Economics, University of Tokyo With Notes and Explanations*

by Tadao Yanaihara, Tokyo: Iwanami Shoten, 1951 ; 通称『矢内原カタログ』)。しかし、これ以降、60年以上にわたりこの『文庫』はいわば、忘れられた「宝物」として経済学部資料室の片隅に埋もれたままになっていたのである。この事について次に簡単に言及しておこう。

もちろん、哲学、歴史、地理、文学など極めて多方面の文献が存在するが、既に記したように経済学関連の文献がほとんど『文庫』にはないことが最大の理由と思われる。編者の矢内原自身が次のように述べている。「生物学・医学等に関する書物がスミスの蔵書のうちに多く、彼が自然科学に興味をもったことは、彼の学風と思想、ひいては第18世紀の思想を理解する上において注目すべき事実」であると（矢内原忠雄「東大経済学部所蔵アダム・スミス蔵書について」、アダム・スミスの会編『アダム・スミスの味—（アダム・スミス研究〈第2集〉）—』、東京大学出版会、1965年、211-212頁）。つまり、『文庫』の構成があまりに非経済学的であったこと、それに加えて経済学部の経済学史の講義が舞出長五郎以降、いわば必ずしも専門ではない経済政策担当の横山正彦によってなされ、横山退官後は関連分野教員の輪番によってなされる体制が40年近く続いたことも「宝物」が忘れられる要因であった。

さらに、もう一つの理由が反映していると考えられる。それは、わが国のスミス研究、特に第2次世界大戦に向かう時期から戦後の1970年代初頭までに現れたマルクス主義の影響によるスミス像の大きな偏りである。それは一時代を画した経済思想史家群、高島善哉(1904-1990)、大河内一男(1905-1984)、内田義彦(1913-1989)、小林昇(1916-2010)、そして水田洋氏(1919～)、田中正司氏(1924～)らが基本部分では共有した一つの“時代精神”によるものである。この時代精神は、欧米、特に英国での反ナチズム、反独裁の役割を担ったりベラリズムではなく、それに代替してわが国戦前の権威主義的な体制への中心的な批判思想となったマルクス主義の影響を大きく受けていた。そのことに呼応して、しばしばスミスは、その労働費用説や生産的労働論などにより、マルクスの労働価値論の名誉ある先駆者と見なされ、時には資本主義社会の疎外を予見する“原マルクス”にさえ擬せられた（最大の典型が内田義彦の『経済学の生誕』（未来社、1953）、岩波新書として普及した『資本論の世界』（1966）、『社会認識の歩み』（1971）でのスミス像）。内田によって描き出されたスミスは、「旧帝国主義」=重商主義を批判するブルジョア・ラディカルな社会思想家であり、理論家としては“不十分なマルクス”であった。こうしたスミス解釈は、確かにその時代の日本の知識人に固有の意味を持った一つの“時代の産物”ではあっても、スミスの実像からあまりにも乖離した一面的なものであったと言わねばならない（有江大介「覚え書き:わが国のアダム・スミス研究の特色——水田洋氏の業績と *Adam Smith's Library: A Catalogue*,

(2000)から見て」『東京大学経済学部資料室年報』4号、2014年、16-24頁)。今般の『スミス文庫』の検討と公開がこうした状況を変える一助になればと思われる。

最後に、本セッションの野原報告にも言及されている博物誌へのスミスの関心に関連した側面について言及しておきたい。この点は、「東大アダム・スミス文庫と *Adam Smith Catalogue, 2000* を考える：報告と水田洋氏への聞き取り」(名古屋大学・高等研究院 2014年12月20日)での高哲男氏(九州産業大学)の報告「スミス研究・利用者の立場から見た東大『アダム・スミス文庫』の特徴——矢内原カタログ、水田カタログも踏まえて——」が指摘した、植物学・博物学・分類学関係の『文庫』収蔵書から推察されるスミスの科学方法論に関する問題である。これは上記『水田カタログ』が *Natural History* に分類したスミス蔵書全体の中で27点に上る鉱山学や火山学、フックの顕微鏡図版本や自然観察の方法にまでいたる関心の広さであって、『文庫』にあるビュフォンだけでなくリンネの『自然の体系』他4点も所持していたことは、スミスの自然神学の受容の状況証拠と見なせる。野原報告では、この傾向をビュフォンを出発点に“博物誌⇒博物学・分類学⇒進化論”のラインまで看取しようとしているが、『天文学史』以外にこうした側面の検討が少ないわが国の研究状況に対して、『文庫』がこうしたスミスの多面的な関心の意味をあらためて検討する一つの契機になることを期待するものである。

なお、上記本文中に挙げられなかった、主に新渡戸関係の近年の参考文献一覧は大会当日に配布致します。

デジタル・ヒューマニティーズの可能性：研究に開かれた新しい目録

福田名津子（一橋大学附属図書館）

I はじめに

本報告では、前半でデジタル・ヒューマニティーズの紹介、後半で『アダム・スミス文庫』新目録への応用可能性を述べる。

デジタル・ヒューマニティーズとは「デジタル技術・コンピュータ技術を活用することで拓けてきた人文学研究の新しい地平」をいう。資料をデジタル化するのはその第一歩だが、それでは紙資料と大差ない用途に終わってしまう。

デジタルが本領を発揮するのは、コンピュータ処理できるデータ形式が整って以降である。古典籍のフルテキスト・データベースで、タイトルや著者名といったメタデータによる検索のほか「本文中の語句」も検索可能なのは、手入力や Optical Character Recognition (OCR) を通じ、本文が画像から文字に起こされているためである。

別の事例では、あらかじめ準備したメタデータを検索・抽出・リンクさせ、ある書籍の地下出版状況を地理的に視覚化することもできる。

一般に、デジタル・ヒューマニティーズが成果を生むには4段階ある。第1にモノをデータに変換する段階（デジタル化）、第2にメタデータを付与する段階、第3にメタデータを計算する段階、第4に計算結果を分析する段階である。

II 報告者のこれまでの取り組み

報告者は、フルテキスト・データベースの全文検索機能を利用し、「アダム・ファーガソンの商業的アート概念：The Making of the Modern World を用いて」（『一橋大学附属図書館研究開発室年報』第2号、19-37頁、2014年4月）を執筆した。

ファーガスンは商業 *commerce* と商業的アート *commercial arts* を区別しており、後者は、生活に要するモノの獲得全般に関するアートを指し、採取・生産・交換の概念とも含んでいる。

論文では、ファーガソンの定義は当時一般的であったのか彼独自のものなのか明らかにするため、フルテキスト・データベースを用いて調査を行った。調査対象時期はファーガソンの著作物が集中している18世以降半とし、*commercial art(s)* で全文検索をかけ用法を判断した。検索で見つかった83の用例からファーガス

ンのような広義の用法を見つけることはできず、商業的アートの定義は彼独自のものと結論づけた。

全文検索機能を用いた研究手法の利点として、ひとりの人間が可能な読書量・記憶量を超えて関連資料が見つかること、語句の登場回数が正確に出ることが実感された。全文検索機能を用いた研究手法の難点として、OCRの精度という技術的問題、膨大な検索結果を私たちは適切に処理できるのかという人的問題が実感された。

II 東京大学『アダム・スミス文庫』へのデジタル・ヒューマニティーズの応用可能性

次に、デジタル・ヒューマニティーズ的発想を東京大学経済学部資料室所蔵『アダム・スミス文庫』の新目録にどう応用しうるか、その可能性を示す。

『アダム・スミス文庫』目録は冊子体で5種あり（文末参照）、スミスによる引用情報を追加するなど目録規則で定められた以上の情報を備えたものもある。オンライン・カタログ（東京大学 OPAC）には、目録規則で定められた標準的なメタデータがそろっている。

これらの成果を踏まえた新目録は、紙と電子の両媒体での公開を目指しているが、主眼はむしろ後者にある。というのも、紙媒体は物質性を備えているため一覧性・全体把握に優れているが、同時にモノ固有の問題も抱え、電子媒体はその限界を超えることができる。

電子目録の利点として第1に、紙媒体で表現できる秩序はひとつしかないが、電子媒体は複数の秩序を表現できる。紙目録の場合、たいていは著者名のアルファベット順を採用しており、言語別など他の秩序で利用したい場合は、索引からひとつひとつ手作業で拾い上げていくしかない。一方、電子目録は著者名・タイトル・出版年・出版者等メタデータが切り分けられているため、検索やソートを繰り返し試すことができる。第2に、電子目録では、目録情報と図書本体のデジタル画像をリンクでつなぎ、目録からすぐさま本文を見に行くことができる。第3に、電子目録と図書のデジタル画像を同時に公開すれば、目録の質を広く外部にも問うことができ、適宜更新・充実させる契機を得る。紙目録は版を重ねない限り変更不可であるが、電子目録は有機物のように成長を遂げうる。ただし、変更の記録を残し可逆性を持たせるため、バージョン管理はあってしかるべきかもしれない。

III 現状のオンライン・カタログと電子版新目録の相違

現状のオンライン・カタログと電子版新目録はともに以上の利点を持っているが、違いもある。新目録ではデジタル・ヒューマニティーズ的発想を応用するため、メタデータを追加入力する予定である。

たとえば、目録規則上省略されたタイトル語句の復元・書き込みの翻刻・書き込んだ人物の同定・主題・注釈などのデータを整備すれば、主題と書き込み分量の相関関係が明らかになる。メタデータの計算を視野に入れ、メタデータを付与するという発想は従来の意味の目録というより、むしろ研究目的にそって拡張したデータベースととらえるべきで、そこに新規性がある。

IV おわりに

以上より、スミス文庫新目録は、「研究に開かれた目録」と表現することもできる。新たに作成されたメタデータは研究上の知見を含むので、公平性・妥当性・信頼性が問われ続けるという意味でも開かれている。オンライン・カタログと図書館のデジタル画像（一部）はすでに公開済みのため、メタデータの追加・修正には外部からの協力が随時見込める点でも開かれている。

V 今後への期待

さらなる期待として、メタデータ付与の基準の統一を計れば、エディンバラ大学やグラスゴー大学所蔵のスミス文庫とオンライン上で合成でき、物理的事情にとらわれず分析が可能となる。

<5種のアダム・スミス文庫目録：刊行順>

Bonar, James. *A catalogue of the library of Adam Smith : author of the 'Moral sentiments' and 'The wealth of nations'*. Macmillan, 1894.

— *A catalogue of the library of Adam Smith : author of the "Moral sentiments" and "The wealth of nations"*. 2nd ed, Macmillan, 1932.

Yanaihara, Tadao. *A full and detailed catalogue of books which belonged to Adam Smith : now in the possession of the Faculty of Economics, University of Tokyo, with notes and explanations*. Iwanami shoten, 1951.

Mizuta, Hiroshi. *Adam Smith's library : a supplement to Bonar's Catalogue with a*

アダム・スミス文庫目録の比較

checklist of the whole library. Cambridge University Press, 1967.
 —. Adam Smith's library : a catalogue. Oxford University Press, 2000.

	Bonar 1932	Yanahara 1951	Mizuta 2000
収録数	1100エントリ？	141エントリ	1808エントリ
記載の秩序	アルファベット順 (著者名)	アルファベット順 (著者名)	アルファベット順 (著者名)
書誌情報の構造	■ 一般的な書誌事項 著者名 書名 (省略が明示的でない) 出版地 出版年 巻数	著者名 書名 (省略あり) 出版地 出版者 出版年 巻数 頁数	著者名 書名 (省略あり) 出版地 出版者 出版年 巻数
	大きさ (判型)	大きさ (縦のみ、cm表示)	大きさ (縦と横、mm表示)
	■ 特記事項 紙の素材	標題紙の情報 (文字の色、装飾) 蔵書票の有無	なし
	■ 所蔵に関わる事項 来歴 (Bannerman/Cunningham) 所蔵機関		来歴 (Bannerman/Cunningham) 所蔵機関
	■ 目録/作成者の研究成果 スミスによる引用箇所 (赤)	他目録との照合 (Bonar 1932)	スミスによる引用箇所 他目録との照合 (SC 1781, Bonar 1894)
記述の変更	凡例なし	凡例なし	<ul style="list-style-type: none"> ・大文字の使用を最小限に ・ギリシア語にはアクセントを追加 ・フランス語のアクセントを現代化 ・ラテン語の綴りを現代化 ・句読法を修正 ・出版年をアラビア数字に修正 ・縮約形をもとの表記に (M^r. やq-contractions)
索引	なし	なし	<ol style="list-style-type: none"> 1. 主題 2. 寄贈本/予約購読本 (著者名別) 3. 出版地 4. 出版者/印刷業者/販売業者 5. 現在の所蔵機関

『アダム・スミス文庫』の調査から見えてくるスミス像

野原慎司

東京大学大学院経済学研究科講師

nohara@e.u-tokyo.ac.jp

I はじめに

東京大学が蔵書するアダム・スミス文庫から見えてくるスミス像について本報告では述べたい。

スミスは死に際して、原稿類の焼却を友人に依頼したため、刊行物と死後に発見された学生の筆記ノート、手紙以外は、手書きメモ・原稿の類は存在しない。ところが、現在残されているそれらすべてのスミスの著述からはその全貌が窺えない知的関心をスミスが有していたことは、スミス自身が述べている。「同様に、私は準備中の他の二つの大きな著作がある。一つは、あらゆる異なる部門の文芸、哲学、詩、雄弁についてのある種の哲学的歴史である。もう一つは、ある種の法と統治の理論と歴史である」¹。そのうち後者については、スミスのグラスゴー大学での講義の学生の筆記ノートとしての『法学講義』の発見によって、そのあらましが明らかになっている。ただし、前者については、『哲学論文集』に含まれる、「天文学史」、「古代物理学史」、「古代論理学と古代形而上学の歴史」、「模倣芸術について」、「イギリスならびにイタリアの詩形」の諸論文、および『修辞学・文学講義』によってその内容の一部を知ることができるものの、全貌は不明である。スミスの蔵書の傾向を分析することは、全貌を知ることのできないスミスの著述プランの一端を推測することを可能にする。

加えて、スミスの著作物に記されていることのみから明らかになっていないスミスの知的関心もあるであろう。したがって、スミスの蔵書を通じて、スミスの知的関心の傾向を窺うことができる。

そもそも、スミスの蔵書はどれくらいあるのか。Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library: a catalogue*, (Oxford U. P., 2000)には1808タイトルが記載されている。そのうち、東京大学が所蔵するのは160タイトルであるから、全世界のスミス蔵書のうち約8.8%を占めることになる。したがって、東京大学の蔵書のみからスミスの知的関心の傾向の全容が分かる訳ではないことを前提とした上で、東京大学のスミス文庫から分かるスミスの知的関心の傾向を調査しているという点をあらかじめ

¹ Adam Smith, "To Le Duc de La Rochefoucault", 1795, in Smith, *Correspondence of Adam Smith*, ed. by E. C. Mossner & I. A. Ross, Indianapolis: Liberty Fund, 1987, pp. 286-7.

めお断りしておきたい。次節では、東京大学スミス文庫の概要を示し、その上で、そこから判明したスミス像を示したい。

II 東京大学スミス文庫の概要

まず東京大学スミス文庫の概要を示したい（数字はタイトル数（巻数）を示す。

	歴史	文学	哲学	博物誌	旅行記	スミス自身の著作	その他
1776-1790	10(28)(a)	15(38)(b)	2(4)	1(2)	1(4)	3(6)(c)	6(7)(d)
1759-1775	6(13)(f)	9(11)(g)	3(11)	6(30)	6(10)	0	8(18)
1748-1758	1(1)(h)	2(2)(i)	0	2(4)	0	0	5(5)(j)
1723-1747	9(34)(k)	5(11)(l)	4(5)	0	0	0	5(5)(m)
1701-1722	4(8)(n)	2(2)(o)	0	0	1(1)	0	0
1651-1700	8(12)(p)	3(3)(q)	3(4)	2(3)	2(2)	0	4(4)(r)
1601-1650	4(4)(s)	2(4)(t)	0	0	3(3)	0	8(8)(u)
15C	3(3)(v)	1(1)(w)	0	0	0	0	1(1)(x)
小計	45(103)	39(71)	12(24)	11(39)	13(20)	3(6)	37(48)

Notes;

(a) スコットランド史 2(3)、フランス史 2(17)、アメリカ史 2(3)、古代史 1(1)

(b) イタリアの叙事詩 5(18)、叙事詩以外のイタリア詩 7(17)、イタリアの劇作 1(1)、美学 1(1)、スコットランド詩 1(1)

(c) スミス自身により蔵書目録(*A catalogue of books belonging to Adam Smith, Eeqr. 1781*).

(d) 数学、宗教、辞書、M. d'Alembert, *Éloges lus dans les séances publiques de l'Académie Française*

(f) イングランド史 2(3)、インド史 1(2)、ポルトガル史 1(3)、南米史 1(4)、アイルランド史 1(1)

(g) イタリアの叙事詩 2(6)、叙事詩以外のイタリア詩 1(1)、イタリアの劇作 1(1)、イングランド詩 3(6)

(h) フランス史 1(1)

(i) フランスの劇作 1(1)、スコットランド詩 1(1)

(j) 政治理論、法学、交易、自然哲学、農業

(k) スコットランド史 3(4)、イングランド史 2(5)、フランス史 2(18)、スイス史 1(6)、アイルランド史 1(1)

- (l) イタリアの叙事詩 2(6)、フランスの劇作 1(1)、劇作以外のフランス文学 1(1)、
イングランド詩 1(1)
- (m) 言語 1(1)、辞書 2(2)、地理学 1(1)、医学 1(1)
- (n) スコットランド史 1(1)、イングランド史 1(3)、イタリア史 2(4)
- (o) 英文学 1(1)、フランス文学 1(1)
- (q) 美学 1(1)、イングランド詩 2(2)
- (r) 医学 1(1)、政治理論 3(3)
- (s) イタリア史 1(1)、中東史 1(1)、スイス史 1(1)、北米史 1(1)
- (t) イタリアの叙事詩 1(1)、美学 1(3)
- (u) 政治学 1(1)、ベネツィア法文書 1(1)、地理学 6(6)
- (v) イングランド史 1(1)、フランス史 1(1)、イタリア史 1(1)
- (w) 美学 1(1)
- (x) 貨幣学 1(1)

以上の調査により判明したのは、スミスの蔵書がきわめて多くの分野にまたがっているということである。なおかつ、東京大学の蔵書分には、法学・政治学関係のものは数点見られるものの、経済学関係のものはほぼないということである。

蔵書のなかでとりわけ重要なのは、スミス自身により蔵書目録(*A catalogue of books belonging to Adam Smith, Eeqr. 1781*)である。矢内原カタログにそれは筆写されているものの、補注や注釈が十分になされておらず、現在鋭意調査中である。

蔵書傾向から明らかになってきたのは、通常語られることの多い経済学者・自然法学者・道徳哲学者としてのスミス以外のスミス像である。具体的には、①世界への関心、②博物誌の愛好、③イタリア叙事詩の愛好、というスミスの知的関心の傾向が見られる。

①世界への関心

たしかに、スミスはイングランド史の著作の収集を行っている²。ただ、同時に、世界各国についての歴史・地理・旅行記も収集している。例えば、フランス³、

² For instance, Thomas Carte, *A general history of England...*, 4 vols., London, printed for the author, 1747-55. Anon., *A complete history of England...*, 3vols., London, printed for B. Aylmer, 1706. James Tyrrell, *The general history of England...*, 3vols., London, printed for W. Rogers etc., 1700-1704. Sir Bulstrode Whitelocke, *Memorials of the English affairs...*, London, printed for N. Ponder, 1682.

³ Michel La Vassor, *Histoire du règne de Louis XIII...*, 14 vols., Amsterdam, Chez Zacharie Chatelain, 1732-1751.

スイス⁴、ヴェニス⁵、イタリア⁶、トルコ⁷、インド⁸などである。スミスは、イングランド・スコットランドのみに関心があったのではなく、ほぼ全世界に関心があったということが、ここから窺えるのである。実際、『法学講義』や『国富論』で特に、スミスは、スコットランド・イングランドのみならず、他の諸国についてもさかんに言及している。その意味では、自身の想像力のなかではスミスはコスモポリタンであったかもしれないといえる。

初期近代は、ヨーロッパ人が、貿易者や旅行者や宣教師として、ほぼ世界中を旅行した時代であった。彼らのうちの一部は、旅行記という形で旅行先の文化・風習・文物・思想などを記録した。そのうちの多くにはむろん不正確な記述や、彼らの偏見が反映したものも含まれるものの、それらの旅行記はヨーロッパ人にそれまで知られていなかったか、古典古代・聖書の記述を頼りにせねばならなかった地域への新たな情報をもたらした。前述のように、旅行記に関心を持っていたのは、スミスのみではない。ヴォルテールもモンテスキューも、スコットランド啓蒙の思想家の多くも、旅行記に関心を払った。そこから、聖書や古典古代の書物の世界観を超えて、彼らなりの世界観を築きあげようとした。その成果の一端がスコットランド啓蒙の「四段階理論」であり、啓蒙主義における「推測的歴史」であったということもできる。

また、スイス、ヴェニス、イタリアの共和国の歴史の著作が含まれていることは、スミスの共和主義への関心を示すものと受け取ることもできる。共和主義をモデルとした国家は、古典古代のみに存在するものではなく、同時代ヨーロッパに現実に存在するものでもあった。

②博物誌の愛好

⁴ Johann Georg Altmann, *L'Etat et les délices de la Suisse...*, 4vols., Basle, Chez E. Tourneisen, 1764. Abraham Ruchat, *Histoire de la réformation de la Suisse...*, 6vols., Geneve, Chez M. M. Bousquet et comp., 1727-1728.

⁵ Abraham Nicolas Amelot de La Houssaye, *Histoire du gouvernement de Venise...*, Amsterdam, 3vols., Chez D. Mortier, 1714.

⁶ Jean Baptiste Bourguignon d'Anville, *Analyse géographique de l'Italie...*, Paris, Chez la Veuve Estienne & fils, 1744. M. De la Condamine, *Journal of a tour to Italy*, London, printed for T. Lewis, 1763.

⁷ George Sandys, *Sandys Travels, containing an history of the original and present state of the Turkish empire...*, 7th ed., London, printed for J. Williams junior, 1673. François baron de Tott, *Mémoires du baron de Tott : sur les Turcs et les Tartares*, Amsterdam, 1784.

⁸ d'Anville, *Antiquité géographique de l'Inde...*, Paris, l'Imprimerie Royal, 1775.

スマスは多数の博物誌の著作を保持している。21巻の Buffon's *Histoire Naturelle*, および3巻の Carl von Linné's *Systema Naturae* (3 vols.) がそこに含まれる。自然科学とスマスとの関係では、ニュートン主義のスマスへの影響が語られることが多いが、スマスは博物誌からも影響を受けていた。ビュフォンはリンネとともに近代生物学の父として知られている人物である。とくにビュフォンは、古典古代の書物や聖書に依拠した生物観から脱却し、観察と推測に基づいて新たな生物観を提示した。すなわち、神が与えた種は不変であるという古い生物観から、生物は徐々に変化するという生物観であり、その点で進化論を先駆けている点がある。

③イタリア叙事詩の愛好

蔵書のなかには、イタリアの叙事詩も多い。Torquato Tasso, *Gerusalemme liberata* の三つの版(1724, 1763, 1787) をスマスは所持している(タッソ(1544-1595)はイタリアのルネサンス期の叙事詩人である)。『エルサレム解放』は、第一次十字軍によるエルサレムの解放についての叙事詩である。しかし、この叙事詩は、史実に忠実なものではなく、多数の空想的アネクドットを含んでいる。また、スマスは、Lodovico Ariosto の詩を所持している(アリオスト(1474-1533)はイタリアのルネサンス期の叙事詩人である)。Ariosto, *Orland Furioso* の二つの版(1746, 1785)をスマスは所持している。『狂えるオルランド』はシャルルマーニュ活躍の時代を背景とした騎士道物語であるが、やはり史実に忠実なものとは言えない。

当日の大会報告においては、以上の蔵書傾向のあらましをふまえつつ、②について、より具体的にスマスの蔵書から分かるスマスの知的関心の傾向についてフォーカスを絞りつつ論じたい。

東大『スマス文庫』が所蔵する博物誌関連の文献のうち、特にビュフォンについては、21巻所蔵するなど、スマスの関心の深さが見て取れる。なおかつ、リンネについても複数巻スマスは所持している。生物についての研究は、この当時、神学から近代生物学へと移行を始めた萌芽期にあったが、スマスは博物誌の発展による生物観の変化に気づいていた。ビュフォンはまた、地球の創造時期の推定も行ったが、それを行うことは聖書の記述に抵触する行為であった。

スマスの博物誌への関心は、博物誌を取り巻くこれらの文脈を踏まえると、世界認識上の重大な選択に関わるものであったことが理解できる。